

御国の完成に関する黙想

鈴ヶ峰キリスト福音館

Message by Nobumasa. H

2026. 2. 1～2. 28

サムソンに関する考察

中心線：誓願から始まり、一体へと至る道筋

奥義は常に「一体」の姿で描かれる。創造以前の御旨においてすでに定められていた神の愛の御目的そのものであり、このことは聖書全体を通して一貫している。花婿が花嫁のために自らを捧げる誓願の祈りに始まり、献身のうちに贖いの愛の中でその捧げられた身が裂かれ、その愛は世界へと向かい、あふれ、外に落ちた者へと届く憐れみへと広がっていく。やがてその深淵において、異邦とイスラエルが一つの新しい人として造り上げられるところへと至る。

サムソンの物語は、この誓願が向かうところを、キリスト以前の時代における霊的な緊張の中で示された救いの物語として受け止められる。誓願の子としてのサムソンの誕生には、マノアへ現れた主のみ使いが全焼のいけにえの炎の中に昇るという出来事が置かれている。ここに、誓願の本質——献身が神に受け入れられ、昇る供えとして現れる姿——が示されている。誓願は、献身したその身が祭壇に置かれ、すべてが神に明け渡され、神に受け入れられる「昇る愛」に至る祈りである。その本体は、サムソンの誕生の場面において、み使いが炎の中に昇るという象徴的行為によってあらかじめ示されていた。

彼の死は、誓願の本質が反映された救いの全うであり、その出来事の中で「全焼のいけにえ」そして「携挙」の持つ意味が象徴的に果たされているものと捉えることができる。サムソンの死そのものを歴史的に「全焼」や「携挙」と読むのではない。物語全体を通じて誓願の本質が誕生の時すでに啓示されていた。すなわち、サムソンが自らを犠牲としてささげ、民の救いのために命を差し出したその最期は、誓願の指し示すところの目的——献身により命が定められ、捧げられ、神に受け入れられる供えとして昇る構造——の型に与っている。

この誓願を背景に読むとき、サムソンの物語全体が奥義について語っており、キリストの日が来る前——すなわち時が満ちる前には全うされることのない一体化の奥義が、その日を先取りするように逆向きの象徴の中に置かれていると理解できる。誓願の子（教会）と異邦の女（外に落ちたイスラエル）という象徴を通して、神の創造以前から黙示録の完成へと至る御旨が、誓願の啓示（全焼の供えの中に昇る主の御姿）を起点に、裂かれ・憐れみ・一つとされるという奥義の影として示されている。

— 誓願の子としての教会と、逆転の奥義としての愛と憐れみ —

序：サムソン物語は「謎」として置かれた奥義である

サムソンの物語ほど、読む者を戸惑わせるものはない。誓願の子として生まれ、神の霊が臨み、士師として立てられた人物が、なぜ異邦の女を繰り返し愛したのか。なぜ父母はいとい、しかし主はそれを用いられたのか。なぜ盲目となり、なぜ死によって勝利がもたらされるのか。これらの出来事は、字義通りの読みでは説明することはできない。旧約の物語が「謎」として置かれ、終わりの日に、奥義の道筋を辿るように仕組まれていることを示している。

旧約は歴史であると同時に象徴であり、そこに隠された御計画は、表層の倫理や出来事の因果を整合しようとする試みだけでは明らかとされない。物語の表面はしばしば逆説的で、ねじれ、矛盾し、理解を拒むように見える。しかしその背後には、創造以前から流れる愛と憐れみの中心線が通っている。

主イエスは「譬えを用いずに語ることはなかった」。また、「あなたがたには奥義が知らされているが、彼らには知らされていない」と。主の言葉は、旧約の救いの型をどのように受け取るべきなのかを導いている。旧約はみこころの奥義を象徴を通して語り、歴史に散りばめられた出来事は、キリストの光を受けて初めて意味を持つ。旧約の物語は「そのまま読むだけでは奥義に届かない」。そのまま読むなら、サムソンは弱い士師、エフタは軽率な父、ホセアは悲劇の夫であり、アブラハムは残酷な父に見える。しかし、キリストの啓示が与えられたとき、これらの物語は、神の御計画を映し出す鏡として立ち上がる。旧約は、キリストの光の中で初めてその御計画の本意を開く物語である。

士師記——とりわけサムソンの物語は、旧約の中でも最も難解な象徴を扱っている。それは、サムソンの生涯が、誓願の子としての教会の姿、花婿キリストの愛の逆転、異邦とイスラエルの一体、そして昇る救い（携拳）へと至る道筋を、一つの物語の中に重ねているからである。

サムソンの物語は、倫理的に読めば破綻し、歴史的に読めば不可解であり、道徳的に読めば矛盾に満ちている。しかし御霊の導きの中で、象徴としてとらえるなら、そこに神の御旨が浮かび上がる。それは、創造以前の愛から始まり、誓願として現れ、献身として裂かれ、憐れみとしてイスラエルに届き、一体の奥義として完成するという、救済史の中心線が貫かれているからである。

サムソンの物語は、物語自体に「謎」と「たとえ」が据えられ、神が物語に譬えを置いていることを信仰者に隠しておられない。神の不思議を注意深く扱うよう求められている。誓願の子の愛はなぜ異邦へと向かうのか。父母はいとつたのに、なぜ主はその出来事を用いられたのか。なぜ盲目となり、死によって勝利へと導かれるのか。これらは、歴史として語るだけではなく、神が意図的に配置した象徴の断片であり、逆転の奥義を辿る手がかりとなっている。こうして物語は、神が人に示された「たとえ」を、キリストの啓示によって初めて開かれるものとなる。そして、理解しがたい物語でればあればあるほど、まだ見ぬ出来事である終末に関係があると感じられる。終わりの日に、御子の光を通して解かれるたとえを、御霊は求める者に開こうとしておられるのだと思う。

第1節 誓願 — 花婿の愛の起点 誓願の子=終末の教会という型

サムソンは誓願の子として生まれた。誓願の子とは、花婿キリストから生まれた花嫁となる者、すなわち終末の教会の影であり、その誓いこそが愛の源泉である。誓願は、花婿が花嫁となる者のために自らを捧げるといふ愛の約束として現れ、その誓願の中から誕生した存在が教会である。したがって、サムソンの誕生は、キリストの愛餐の誓願から生まれた教会の誕生を象徴している。（※ ルカ 22 章の聖餐の考察を参照）

サムソンの姿は、終末の教会の特徴と驚くほど重なる。彼は誓願の子であり、神の霊が臨む者であり、救いの器として立てられ、不完全さを抱えながらも用いられ、最後には献身を完成する者であった。これらはすべて、終末の教会の姿そのものである。教会は誓願の中から生まれ、聖霊を受け、世界の救いの器として立てられ、弱さと肉の葛藤を抱えながらも、最後には献身を完成し、愛の明け渡しを通して神に受け入れられる存在である。

サムソンの肉と霊の二重性は、終末の教会の二重性を映し出している。肉の弱さ、誘惑への脆さ、倒れやすさ、そして誓願の誓いを守るときに働く力、臨在の御霊、敵を打ち破る霊の力、献身の完成——これらはすべて、終末の教会が抱える緊張と栄光の影である。サムソンは倒れ、迷い、しばしば肉に引きずられた。しかし、神は彼を見捨てず、最後に彼を整え、献身を完成させた。これは、終末の教会がどれほど弱く見えようとも、神がその誓願を忘れず、最後には教会を整え、献身を完成させるという約束の影である。

そして、この終末の教会の歩みには、主がペテロ(岩)に語られた預言の光景が重なる。

「あなたは若い時には自分で帯を締めて自分の行きたい所へ行っていた。しかし年をとると、他の者があなたに帯を締め、あなたの行きたくない所へ連れて行く。」

これは単なる殉教の予告ではなく、終末の教会の成熟の姿を示す預言でもある。かつてペテロは主を否んだ。しかし、否んだ者が、最後には自分の意志ではなく、主の導きによって「行きたくない場所」へと連れて行かれ、その苦難の中で主の栄光を表す者となった。

ペテロの生涯は、弱さから始まり、主の祈りによって立ち、献身によって捧げられ、愛の明け渡しによって最後には神に受け入れられるという、誓願の子の道をそのまま体現している。

サムソンの生涯も同じであった。自分の力で立ち、自分の思いで動き、自分の欲望に引きずられた者が、最後には自分の意志ではなく、神の導きによって「行きたくない場所」——死（殉教・罪の世の贖いの犠牲）と献身の場所へと連れて行かれ、そこで神の栄光を表す。ペテロが主の預言の通りに生涯を閉じたように、サムソンもまた誓願の子の道を歩み、献身を完成させた。

これは、終末の教会が歩むべき道の影である。教会は自分の力ではなく、主の誓いによって立ち、自分の望むままをではなく愛の導きによって「行きたくない場所」へと連れて行かれ、そこで主の栄光を表す。誓願の子は、弱さの中で愛に導かれ、献身の中で整えられ、最後には明け渡しによって神に受け入れられる者である。

サムソンの生涯は、その姿を象徴として描いていた。サムソンは終末の教会の型であり、ペテロはその本体の先駆けであり、教会はその完成形である。

第2節 異邦の花嫁と一体の奥義

サムソンがイスラエルの中にではなく外にいる女——異邦の女を愛したという出来事は、律法の規範から見れば明らかに「してはならないこと」であり、ナジル人としての逸脱、士師としての失敗と読まれてきた。しかし、誓願の子＝教会という型の中で象徴として読むとき、この出来事は、終末の教会の愛の方向、律法から福音への反転、そして「一体の奥義」の深層構造を映し出す逆説的な啓示として立ち上がる。

サムソンには、花婿キリストの影と、花嫁である教会の影が重ねられている。そのため、物語の中では花婿と花嫁の立ち位置が交差し、奥義が象徴として現れる。サムソンの型はまずキリストにおいて当てはめられるが、最終的には終末の教会の型として読み直される。

サムソンはイスラエル人であり、ナジル人であり、律法を守るべき者であったから、本来異邦の女を愛してはならない。律法はこう命じる。「あなたは彼らの娘をあなたの息子の妻としてはならない」（申命記7:3）。異邦は偶像、不浄、敵、契約の外とされ、境界は定められていた。異邦との一体はキリストの贖いが満ちるまでは与えられていない道であった。それにもかかわらず、サムソンはティムナの女、ガザの遊女、デリラというイスラエルの外にいる女たちを愛した。この「愛してはならない者を愛している」というねじれは、律法下の人間の不従順や弱さとして片づけることもできるが、より深く読むならば、律法の禁止の背後に隠されていた「本体の愛」が、まだ時が満ちていない段階で影として漏れ出ている徴として読むことができる。

律法の禁止の背後に置かれた本体は愛である。律法は「混ぜるな」「交わるな」「境界を越えるな」と命じるが、この先に、やがてキリストにおいて隔ての壁が打ち壊され、二つのものが一つの新しい人に造り上げられるという神の御計画が置かれている。律法は命の勝利に与るまでの、主の日を迎えるための神の囲いであり、来るべき日までの準備の定めである。

サムソンの不完全な行動——異邦人との関係や復讐の行為——は、律法下での人間の限界と、まだキリストの日を見ていない時代の「届かない愛」を象徴している。しかし、キリストが来られ、十字架と復活によって贖いを成し遂げられた後には、かつて「愛してはならない者」とされた異邦こそが、愛すべき者、迎えるべき者、一体となるべき花嫁の一部となる。パウロはこう語る。「異邦人も同じ体、同じ約束、同じ相続にあずかる者となった」（エペソ3:6）。

サムソンが律法の時代に禁を破るように見えながら愛した異邦の女たちは、キリスト以降の本体において愛されるべき対象を先取りした影として位置づけられる。ここで、サムソンの愛は、律法の外に落ちた者を愛されたキリストの愛の影であると同時に、終末の教会が異邦の世界へと向かう愛の影としても読み直される。

サムソンは愛する女の裏切りによって捕らえられ、両目をえぐられ、辱められた（士師記 16:21）。彼は裏切る者をなお愛し続けた。そして、イスラエルは彼の死を伴う犠牲によって勝利を得た。サムソンの型はここで、終末の教会の姿を鮮明にする。

キリストが愛された異邦の花嫁とは、霊の初めのものとしては初穂の教会であり、終末的には異邦に落ちたイスラエルの残りの者である。主の愛は、キリストの似姿とされた誓願の子である教会を通して異邦の世界へと向かう愛を運び、その終局は、花嫁である教会が失われたイスラエルを回復し、異邦の花嫁としての一体へと導く愛に向かう。

彼の物語では異邦の花嫁が回復されることはなく、一体の関係には至らない。しかし、その不完全さの中にこそ、完成の時を待つ本体の愛が写されていた。時が満ちたとき、花婿と異邦の花嫁が結ばれるという一体の奥義が開かれるのを待つ物語である。

ここで重要なのは、この「混ざり合い」が律法の時代には禁じられていたという事実である。律法はこう命じる。「羊毛と亜麻を混ぜて織った衣を身に着けてはならない」（申命記 22:11）。羊毛と亜麻は、本質の異なるものを混ぜることへの禁止の象徴であり、イスラエルと異邦を混ぜるな、という律法を精神を体現している。しかし、箴言 31 章の「エシェット・ハイル（賢い妻）」は、この律法の禁止を超える象徴として現れる。「彼女は羊毛と亜麻を求め、喜んで自分の手でそれを仕上げる」（箴言 31:13）。律法では混ぜてはならないとされた素材を、賢い妻は自らの手で扱い、織り上げ、家族を覆う衣とする。これは、律法の時代には禁じられていたイスラエルと異邦の統合が、キリストの勝利の後には花嫁である教会の働きとして実現することを暗示している。

エシェット・ハイル（賢い妻）は、家の中に閉じこもる存在ではなく、外に出て商売をし、外国と交わり、家族を養い、貧しい者に手を伸ばし、家族と家を覆う衣を整える。これは、贖いのキリストの勝利の世界において、終末の教会が異邦の世界に出て行き、イスラエルと諸国を覆い、整える姿の予型である。かつては混ぜてはならなかったものを、今や混ぜて仕上げるものが許される。それは、隔ての壁が打ち壊され、二つのものが一つの新しい人に造り上げられる勝利が置かれたからである。羊毛と亜麻の混合禁止は、律法下では隔離の象徴であったが、キリストの勝利の後には一体化の奥義の影となる。サムソンのねじれた愛は、この反転の前段階として置かれている。

この構造は、ヤコブの娘ディナとシェケムの物語にも示されている。この悲劇は信仰者に神の守りについて幾重もの問いが発せられ、強い違和感がある物語である。だからこそ、この衝撃的な物語には終わりの日についての啓示が隠されている。創世記 34 章では、異邦との一体化の提案がなされ、割礼を通して一体となることが約束されるが、その結合は欺きと虐殺によって破壊される。愛は姦淫として顕れ、割礼による一体は律法的行為として壊される。なぜか。それは、まだキリストの日を見ておらず、キリストによる一体の時が来ていなかったからである。

サムソンの異邦の女への愛も、ディナとシェケムの物語も、律法下における「届かない一体」「破れた統合」の影であり、キリストにおいて初めて本体が現れる。

サムソンが晴れ着十着を求めた出来事も、この文脈の中で読み直されるべきである。彼が求めた晴れ着は花嫁のためではなく、婚宴の客のための衣であった。しかし、聖書の象徴体系において婚宴の客の衣は花嫁の整えの外側のしるしであり、婚宴全体の聖さと備えを示す。サムソンは異邦の宴会の客のために衣を整えようとしたが、霊的な不完全さと律法下の限界ゆえに、整えることはできず婚宴は破綻した。この破れは、律法下の人間が「花嫁の整え」や「婚宴の備え」を完成できないことの象徴である。しかし、時至ってキリストは、異邦に落ちた者たち

をも贖い、天の御国の婚宴を完成させるために、完全な晴れ着を用意される。サムソンが整えられなかった衣をキリストが整え、終末の教会はその衣を異邦の者に分け与える側となる。

こうして、サムソンの「異邦の女を愛する」という禁じられた行為は、実は十字架以後に実現する「花婿の愛の本体」と「教会の整え」の影であったことが明らかになる。誓願の子であるサムソンは、愛すべき相手を愛することが許されない時代の影であり、終末の教会は、愛すべき相手——外に落ちた者たち——を愛し、イスラエルと諸国を覆い、一体へと導く本体である。

サムソンのねじれた愛、律法下の禁止、羊毛と亜麻の混合禁止、ディナとシェケムの破れた一体、晴れ着十着の失敗——これらすべてが、キリストにおいて反転し、終末の教会において完成する「一体の奥義」の逆転した影としてサムソン物語の中に置かれているのである。

一体の奥義

サムソンの愛した女は異邦であった。しかし象徴として読むとき、この「異邦の女」は単なる異邦一般ではなく、外に落ちたイスラエルの影であることが明らかになる。ここに、サムソン物語の最深部に隠された奥義がある。サムソンの愛は、外に落ちたイスラエルを愛されたキリストの愛の影であり、その愛は裏切られ、拒絶され、しかしなお愛し続ける花婿の愛の影である。サムソンの愛した女は異邦であったが、象徴としてはイスラエルである。この二重性は、異邦とイスラエルが一つの花嫁となるという奥義の中心を示している。

イスラエルはつまずき、花嫁の位置から外れた。しかしそのつまずきは、異邦に救いが及ぶためであり、異邦が満ちるとき、イスラエルは憐れみに閉じ込められ、全イスラエルが救われる。パウロがローマ 11 章で語るこの奥義は、サムソン物語の象徴構造と一致する。花嫁の位置は一時的に異邦に移されるが、最終的には異邦とイスラエルが一つの花嫁として完成する。旧約の象徴体系は、この奥義を逆転した影として置いている。サムソンが異邦の女を愛したという逆転は、終末の教会がイスラエルを愛するという本体の姿の裏返しである。

この奥義は、ルツ記のボアズとルツの物語に示されている。ルツは異邦の女でありながら、ナオミを愛し、その愛がナオミを憐れみに閉じ込め、ボアズの贖いによって二つのものは一つとなる。ルツは異邦の花嫁の影であり、ナオミは外に落ちたイスラエルの影であり、ボアズは花婿キリストの影である。ルツの献身は、異邦の花嫁がイスラエルを愛し、その愛がイスラエルの回復の扉を開くという奥義の影である。サムソン物語とルツ記は、異邦とイスラエルの一体化という奥義を、異なる角度から描いた二つの鏡である。

この奥義は、エフタの物語にも鮮明に刻まれている。エフタは兄弟たちに拒絶され、家から追い出され、「トブの地」に逃れた。トブとは「良い地」「恵みの地」を意味し、エフタはそこで伴侶を得、仲間を得、外で栄えていた。これは、イスラエルに拒絶されたキリストが外に立たされ、異邦の間で受け入れられ、そこで栄えたという構造の影である。しかし、イスラエルが滅びかけたとき、長老たちは外にいるエフタのもとに来て言った。「来て、私たちのかしらになってください」。これは、拒絶した者を後に迎え入れるイスラエルの姿であり、ローマ 11 章の奥義と一致する。

さらに、エフタの誓願はイスラエルの救いのための誓願であった。「もしあなたがアンモン人を私の手に渡されるなら…私はそれを主に献げ、全焼のささげ物といたします」。この誓願は、イスラエル全体の救いを求める誓願であり、その誓願が要求した「明け渡し」は、イスラエルの救いのために必要な犠牲を象徴している。そして、その誓願に応えたのは、最愛の娘であった。娘は父の誓願を聞いたとき、「父よ、あなたが主に誓われたことを、あなたの口から出たとおりに私に行ってください」と言った。これは、旧約の中でも最も純粋な献身の言葉であり、花嫁の献身の影である。娘は父の誓願に忠実に応え、自らを明け渡し、全焼のささげ物として昇っていった。これは、誓願から明け渡しへ、全焼から昇る救いへと至る奥義の光景を映し出すものである。

こうして、エフタの物語は、サムソン物語と同じ中心線を別角度から描いた奥義の双子の影である。サムソン物語が誓願の子の愛を描くなら、エフタ物語は花嫁の献身を描く。サムソンが誓願の子として外に落ちた者を愛した影であるなら、エフタの娘は誓願に応じて自らを明け渡す花嫁の影である。二つの物語は、誓願と献身、愛と明け渡し、救いと一体化という奥義の両側面を映し出す鏡である。

サムソンの愛は弱さではなく象徴であり、終末の教会がイスラエルを愛するという本体の姿を、贖い以前の時代において逆転した形で示した奥義である。サムソンの愛は、誓願から献身へ、憐れみから一体化へ、そして昇る救いへと至る中心線の中に置かれた逆転した影である。異邦とイスラエルが一つの花嫁となるという奥義は、創造以前においてすでに定められていた愛の御旨であり、歴史の中で徐々に開示され、終末において完成する。サムソン物語は、その奥義の中心を描いた旧約の最深部の象徴である。

ここまで見てきた律法下の「届かない愛」の姿をさらに深めるとき、異邦の女は単なる異邦ではなく、外に落ちたイスラエルの影として現れてくる。

第3節 外に落ちたイスラエルの影としての異邦の女 — 逆転の奥義の中心

サムソンが愛した異邦の女たち——ティムナの女、ガザの遊女、デリラ——は、物語の表層では「イスラエルの外にいる者」であり、律法の時代には決して愛してはならない存在であった。しかし象徴として読むとき、これらの女性は「外に落ちたイスラエル」の影として置かれている。本来、花婿の誓願の対象はイスラエルであった。イスラエルは契約の民として花嫁の座に立つべき存在であったが、花婿を拒み、不従順の霊に囚われ、霊的には異邦となり、外に落ちてしまった。血統としてはイスラエルでありながら、霊的状态としては異邦となった者——主イエスが「失われた羊」と呼ばれた者たち——が、象徴として異邦の女の位置に置かれているのである。

したがって、サムソンが愛した異邦の女は、「外に落ちたイスラエル」の影である。サムソンの愛は、律法の外に落ちたイスラエルを愛されたキリストの愛の影である。サムソンは愛する女の裏切りによって捕らえられ、辱められた。キリストもまた、愛する民の裏切りによって捕らえられ、辱められた。サムソンは死によって敵を打ち倒し、キリストは死によってサタンを打ち倒した。この並行構造は、花婿が外に落ちた花嫁を愛し、裏切られてもなお愛し、死によって取り戻すという奥義の影である。

サムソンの最後に与えられた「盲目」は、誓願の子が肉の力を失い、霊の視力へと導かれる成熟の段階を象徴している。誓願の子は、自らの視力と力を失うとき、初めて明け渡しの中で献身を完成させる。サムソンの盲目からの回復と死による勝利は、誓願の子が肉の終わりを通して献身を完成させるという、終末の教会の成熟の影である。

一方、外に落ちたイスラエルの霊的状态は、異邦の女の位置に象徴される。パウロがローマ11章で語る「部分的なかたくなさ」は、花嫁の座から外に落ちたイスラエルの霊的状态を示している。イスラエルが拒絶した花嫁の位置が、一時的に異邦に移される。しかしその逆転の中で、神の憐れみが満ち、最終的にはイスラエルが憐れみに閉じ込められ、回復される。

サムソンの愛の方向——誓願の子が外に落ちた者へ向かう愛——には、終末において教会が担う愛の姿が未完成の形で示されている。サムソンの時代には、異邦の女がイスラエルの影として置かれるしかなかった。しかし終末には、異邦の花嫁（教会）がイスラエルを愛し、その愛がイスラエルを憐れみに閉じ込める。サムソンの物語は、この反転の奥義を「影として」描いたものである。サムソンの愛は弱さであるだけでなく象徴であり、終末の教会がイスラエルを愛するという本体の姿を、贖い以前の時代において逆転した形で示した奥義である。

終末には、主の花嫁とされる教会（異邦の花嫁）が誓願の子として立てられ、霊的に外へ落ちた失われたイスラエルを愛し、その愛がすべてを憐れみに閉じ込め、両者を主の花嫁として一つに統合する。ここに、誓願の子（教会）と外に落ちたイスラエルが、愛と憐れみの中心線に

よって一体へと導かれるという、創造以前の御旨から黙示録の完成へと至る一本の線が隠されている。サムソン物語は、その線を「逆転した影」として描いた最深部の象徴である。

盲目の象徴の源泉については、アダムの目の反転、イサクの盲目、主イエスの盲目、イスラエルの盲目へと続く「盲目の物語」の全体像を見なければならない。盲目は裁きではなく、憐れみと回復のための覆いである。この盲目の奥義の全体像については補足で扱うことにする。

第4節

サムソンの物語を字義通りに読むなら、そこに見えるのは弱さ、裏切り、失敗、そして悲劇である。しかし象徴として読むとき、サムソンの生涯は驚くほど鮮明に、花婿キリストの愛の姿を映し出す。サムソンの愛の軌跡は、十字架の愛の方向を先取りするものであり、誓願の子としての教会が辿る献身の道を先に刻んだものである。ここでは、サムソンの愛とキリストの愛がどのように並行し、どのように奥義の中心線を形づくっているのかを深く掘り下げる。

サムソンは愛する者に裏切られた。ティムナの女は彼の謎を漏らし、デリラは銀貨のために彼を売り渡した。これは、イスラエルが花婿キリストを裏切り、銀貨三十枚で売り渡した出来事と響き合う。サムソンは捕らえられ、縛られ、辱められ、両目をえぐられた。キリストもまた、愛する民の裏切りによって捕らえられ、縛られ、殴られ、目を覆われ、嘲られた。サムソンは死によって敵を打ち倒し、キリストは死によってサタンを打ち倒した。

この並行は偶然ではない。サムソンの生涯には、花婿が外に落ちた花嫁を愛し、裏切られてもなお愛し、死によって取り戻すという愛の道筋が刻まれている。誓願の子として「愛してはならない者」を愛したサムソンの姿は、時が満ちる前に漏れ出た本体の愛の方向を示している。

この流れは終末の教会にも引き継がれる。誓願の子としての教会は、サムソンの歩みを本体として生きる。教会はイスラエルを愛するが、イスラエルはいとひ、拒む。しかし、その拒絶の中で憐れみが満ち、イスラエルは憐れみに閉じ込められ、二つのものは一つの新しい人となる。サムソンの愛の軌跡——裏切り、捕縛、盲目、嘲り、死による勝利——は、キリストの愛の軌跡と重なり、終末の教会が辿る献身の道を先に描き出している。

サムソンの愛とキリストの愛の並行は、単なる類似ではなく、誓願から献身へ、裂かれた側から憐れみへ、そして一体化から昇る救いへと至る中心線の中に配置された救済史の流れである。誓願の子としての教会は、サムソンの歩みを通して、キリストの愛の本体を受け継ぐ。サムソンの愛の軌跡は、終末の教会の愛の予型である。

第5節 逆転の完成

サムソン物語に刻まれた逆転の構造は、第4節で見たように「昇る救いの影」として旧約の中に置かれていた。しかし、この影は終末において本体として反転し、完成する。

その中心にあるのが、「愛してはならない者を愛する」という最大の逆説である。

サムソンの物語における、異邦の女を愛し、両親がいと。しかし、彼は神の選ばれたナジル人であり、神の霊によってイスラエルを救った。裏切られてもなお愛するという最大の逆説は、誓願の子が「愛してはならない者」を愛したという点にある。律法の時代、異邦の女を愛することは禁じられていた。異邦は偶像、不浄、敵、契約の外とされ、境界線は絶対であった。しかし、サムソンはその境界を越え、外にいる女を愛した。これは単なる弱さではなく、贖い以前の時代において、まだ時が満ちていない段階で漏れ出た本体の愛の影である。そして、この逆転は終末において本体として完成する。

サムソンの型では、誓願の子から異邦の女へという方向で愛が流れた。しかし終末の本体では、異邦の花嫁からイスラエルへという方向で愛が流れる。ここに、奥義の中心にある位置の反転が完成する。サムソンの時代には、イスラエルが外に落ち、その位置に異邦が立った。し

かし終末には、異邦の花嫁が成熟し、外に落ちたイスラエルを愛する。この愛がイスラエルを憐れみに閉じ込め、全イスラエルが救われる。

終末の教会は、誓願の子として生まれた存在である。誓願とは、花婿キリストが花嫁のために自らを捧げるという愛の約束であり、その誓願から誕生した存在が教会である。ゆえに、教会は誓願の中に生き、献身の中で裂かれ、その裂かれた愛がイスラエルに届き、憐れみとして注がれる。サムソンの愛は拒絶され、裏切られ、破れた。しかし終末の教会の愛は、キリストの誓願と献身の中に生きる愛であり、その愛はイスラエルを憐れみに閉じ込める力を持つ。サムソンの愛が破れた影であったのに対し、終末の教会の愛は完成した本体である。

ここで、サムソン物語の逆転が完全に反転し、影が本体に変わる。サムソンは誓願の子として、愛すべき相手愛することが許されない時代に生きた。終末の教会は誓願の子として、愛すべき相手——外に落ちたイスラエル——を愛することが命じられた時代に生きる。サムソンの愛は、時代の制約の中でねじれた影として現れた。終末の教会の愛は、キリストの誓願の中で整えられた本体として現れる。サムソンの愛は裏切られ、拒絶され、破れた。しかし終末の教会の愛は、憐れみとしてイスラエルに届き、イスラエルを憐れみに閉じ込め、二つのものを一つの新しい人へと導く。

この瞬間、誓願から献身へ、裂かれた側から憐れみへ、イスラエルから一体化へ、そして昇る救いへと至る中心線が歴史の中で完成する。サムソンの愛は影であり、終末の教会の愛は本体である。サムソンの愛は破れたが、終末の教会の愛は完成する。サムソンの愛は拒絶されたが、終末の教会の愛はイスラエルを憐れみに閉じ込める。サムソンの愛は死によって勝利したが、終末の教会の献身はイスラエルの復活を引き起こす。こうして、サムソン物語の逆転は終末において完成し、異邦とイスラエルが一つの花嫁となる奥義が成就する。

第6節（昇る救いの影）

サムソンの死は、表面だけを見れば悲劇であり、失敗の果ての破滅に見える。しかし象徴として読むとき、サムソンの死は旧約全体の中でも最も鮮明に、昇る救いの奥義を描いた出来事である。そこには、誓願に始まった道がその目的に達し、献身が満ち、神に受け入れられる献げ物として昇り、イスラエルに救いがもたらされ、敵が倒され、神の勝利が現れるという構造が刻まれている。これは、誓願から始まった一本の線が、歴史の中で影として結ばれた瞬間である。

この昇る救いの影は、サムソンの誕生の時点ですでに神ご自身によって保証されていた。士師記13章で、マノアが捧げた全焼のいけにえの炎の中に、主の使いは昇っていった。「主の使いは祭壇の炎の中に昇っていった」。全焼の供え（オウ）は「昇るもの」を意味し、献身が完全に神に受け入れられ、天に昇る献げ物の完成形である。主の使いがその炎の中に昇ったという出来事は、誓願の子の救いの形が「昇る献身」として結ばれることの、神ご自身による保証であった。

サムソンの死は、単なる自己犠牲ではない。彼は盲目となり、力を失い、最も弱い地点で神に向き直り、イスラエルのために自らを差し出した。その献身が満ちたとき、イスラエルに救いが現れ、敵が倒され、神の勝利が示された。ここには、誓願の愛がその目的に達し、憐れみが満ち、イスラエルが包まれるときに現れる「神の顕現」の影が置かれている。

来臨は、誓願の愛がその目的に達し、憐れみが満ち、花嫁の座から離れていたイスラエルが包まれ、異邦と共に一つの新しい人として整えられるとき、その一点に現れる「神の現れ」である。

彼の献身はイスラエルの救いとなり、敵の滅びとなり、神の勝利となった。誓願に始まった一本の線が、昇る救いとして結ばれたのである。サムソンの死は、旧約の最深部に刻まれた「昇る救い」の影であり、その形は誕生の時点で「全焼の炎の中に昇る主」によって保証されてい

た。ここに、誓願から始まり、憐れみに満ち、一体へと導かれ、ついには神の現れへと至る一本の線が、影として置かれている。

第7節 レムナント——花嫁の核、成熟＝測れない、来臨＝神の現れ

サムソン物語は、旧約の中でも最も逆説的で、最も理解を拒む物語として読まれてきた。しかし象徴として読むとき、この物語は、創造以前の御旨から黙示録の完成へと至る一本の線として立ち上がる。その線とは、誓願から献身へ、裂かれた側から憐れみへ、イスラエルから一体化へ、そして昇る救いへと至る、聖書全体を貫く愛と憐れみの中心線である。

サムソンは誓願の子として生まれ、その肉と霊の二重性は終末の教会の成熟の過程を映し出す。サムソンが盲目となり、最も弱い地点で神の言葉に 응답し、自らを明け渡したように、終末の教会もまた、隠れた忠実の中で明け渡し（全焼の供え）を学び、神の現れを迎える者として整えられる。神の現れとは、外から突然訪れる出来事ではなく、誓願の愛がその目的に達し、憐れみが満ち、神がご自身のために残された者たちの成熟と、イスラエルの回復が交わる一点に現れる出来事である。成熟がどのように進んでいるかは、人の目には測れない。神は、見える全体ではなく、隠れた忠実を基準にご自身の時を進められる。

敵の滅びとイスラエルの救いが同時に現れたサムソンの犠牲の献身は、誓願から始まった一本の線が満ちたときに現れる「神の現れ」の影である。サムソンの死は、イスラエルの憐れみと花嫁の成熟が交差する地点の象徴であり、旧約の象徴体系の中で最も鮮明にこの中心線を描き出している。

結論として、サムソン物語は、読者にこの線を辿らせるために置かれた謎であり、その謎はキリストの光の中で初めて解かれる。そしてその線は、愛と憐れみの中心線そのものである。

以上が、誓願の子サムソンに関して、終末的象徴を考察した御国の完成に関する黙想である。

§ 補足1【来臨とレムナント — 主の日の判定と終末の緊張】

I. 主の日の最大の危険：見える現実を基準にすること

主の日をめぐる最大の危険は、見える現実を基準にその時を判断してしまうことである。主の日は、主の教会の整えを待ち、主の日は神の民の残りの者の贖いの日なのだと思えるのであれば、教会が未成熟に見えるとき、またイスラエルが悔い改めていないように見えるとき、人はつい「今ではない」と結論づけてしまう。

しかし聖書が一貫して示すのは、神がご自身の働きを「見える全体」ではなく「残された者（レムナント）」を基準に進められるという事実である。レムナントとは、ユダヤ人や異邦人かという区別ではなく、神がその時代にご自身のために残された者たちである。

主の花嫁とは、「神の教会」—— つまり、イスラエルの回復を含む「全体としてのイスラエル」を指す。これは組織的教会のことではなく、神が残されたレムナントの統合体である。

II. 神が見ておられるのは「隠れた忠実」

人間の目に映る宗教的な巨大さや制度の整いは、神の視点においては必ずしも価値を持たない。むしろ神は、歴史の片隅に隠れ、名もなく、声もなく、しかし心を割いて忠実に歩む者たちを通してご自身の計画を進められる。

エリヤが「私はただ一人」と嘆いたとき、神は「七千人を残している」と告げられたが、この七千人は歴史の記録にも、預言者の視界にも現れなかった。それでも神は彼らを知っておられ、彼らの忠実を基準にイスラエルの歴史を支えておられた。

主の晩餐の大広間を備えた名もなき人物も、パウロを迎えたアナニヤも、神殿の片隅で祈り続けたアンナも、歴史の表舞台には現れないが、神の視点では中心に置かれた忠実な者たちであった。彼らは自らの働きが救済史の中心に位置しているとは思わなかっただろうが、神は彼らの小さな忠実を通して大きな出来事を準備された。

III. バビロン化した宗教の外観と、神が見ておられる本質

神が見ておられるのは、バビロン化した宗教の巨大さではなく、隠れた忠実の確かさである。

ここで言うバビロンとは、主の花嫁である教会そのものではなく、神の名を語りながら神の心から離れ、宗教的権威や制度が自己目的化したときに現れる「宗教のかたち」の象徴である。

黙示録が描くバビロンは、異教世界ではなく、神の民の内側に入り込み、礼拝の外観を保ちながら神の思いから逸れていった宗教的墮落の姿である。

それは教会の外観をまといながら、もはや神がその主人ではないという「宗教のかたち」であり、見える繁栄や制度の整いとして装われるが、その内側の本質はしばしば見過ごされる。

しかし神は、見えないところで祈り、従い、備える者たちの存在をこそ、歴史の本当の土台としておられる。

IV. 生命の徴：イチジクの葉とパンの戻り

主はイチジクの木の花の葉から時を学べと言われたが、これは外観の繁栄を基準にせよという意味ではなく、季節の到来を告げる「生命の徴」を見よという招きである。

麦の種が地中で芽を動かし始めるとき、その動きはやがて地上に現れ、実りの季節を告げるように、イチジクの木もまた、内側で始まった生命の動きが枝先に現れ、葉となって可視化される。

ルツ記で、ナオミが「主がご自分の民を顧みて、パンを与えられた」と聞いたときに帰還したのも同じ構造である。パンが「戻り始めた」という徴を聞いて帰った。イスラエルの中に御言葉がささやかれ始め、生命の動きが外側に現れ始めるとき、それは葉が出る徴であり、季節が近いことを知らせる合図である。

徴は外観にではなく、神の生命の動きに現れる。

V. 成熟は見えない：主の日は神の主権の中で進む

この視点に立つと、教会の成熟も、イスラエルの悔い改めも、外側から測ることはできない。成熟がどのように進んでいるかは、人の目には見えない。神は、見える全体ではなく、隠れた忠実を基準にご自身の時を進められる。

イスラエルの救いもまた、ゼカリヤが語るように「その日」に開かれる。神の民の悔い改めは、人間の観察の延長線上ではなく、神の霊が注がれるその時に開かれる。

ゆえに、見える現実から主の日を判定することは本質的に誤りやすい。主の日は、人間の観察や推測の延長線上ではなく、神の主権の中で、残された者の成熟とともに近づいている。

VI. 主の日の緊張は恐れではなく信頼へ

この理解に立つと、主の日をめぐる不健全な緊張は消え、聖書の言葉はそのままストレートに読める。「その日その時は、誰も知らない」という言葉は、恐れではなく、神の主権への信頼の呼びかけとして響く。

主の日は、見える教会の状態でも、見えるイスラエルの状態でもなく、神がご自身のために残された者たちの上に進めておられる成熟の中で決定される。そしてその成熟は、人の目には見えないところで、すでに進んでいる。

見える教会が未成熟に見えるとき、見えるイスラエルが悔い改めていないように見えるとき、その判断はバビロンの外観に基づくものであり、神が見ておられる残された者の成熟とは無関係である。神は、隠れた忠実の中にご自身の時を備えられる。

VII. 主の日の福音：恐れではなく、いのちの招き

主の日は恐れの対象ではなく、神の民が見えないところで整えられているという確信の中で待ち望むべきものである。主の日は、外側の宗教的状況や歴史的動向によって左右されるものではなく、神がご自身のために残された者たちの成熟と悔い改めの中で、神の時に、神の方法で訪れる。

人間の目には見えないが、神の目には確かに進行しているこの成熟こそが、主の日の真の基準である、と黙想する。

主の日の福音の姿について、「急いで逃げなさい」という言葉は、いのちのない者を恐れで急がせるための言葉ではない。ノアやロトの時代においても、いのちのある者だけがその呼びかけを聞き分け、時の到来に自然に反応した。死を前にした者に与えられる最後の憐れみも、急がせて告白させるという構造ではなく、主のいのちが最後に芽を出すという憐れみの出来事である。

「急ぎなさい」との言葉は、実りとその時の執行が一致する瞬間の言葉であり、生命のない者に向けた強制ではない。実が熟したときにすぐに刈り入れが行われるように、生命が満ちたときに主の時がただちに訪れる。恐れによる急かしは福音の姿ではなく、いのちの招きこそが福音の本質である。

救いの日には確かに終わりがある。しかしその終わりは、恐れを生み出すためではなく、今日という日の招きが真実であることを示すために置かれている。急がせても心は動かないが、いのちの芽は、神の言葉に触れたその瞬間から動き始めるものとなる。

主の日は、恐れによって急がされるものではなく、いのちが満ちた者が祈りによって迎える日である。それゆえ、主の日を待ち望む者は、外側の状況ではなく、神が見ておられる隠れた忠実の中で進む成熟に目を留め、そのいのちの招きに今日という日を応答して歩むのである。

§ 補足2【盲目の奥義 — 創造から終末まで貫く覆いの中心線】

サムソンの盲目を救済史全体の流れの中で見ると、創造から終末までを貫く盲目と覆いの中心線が立ち上がる。盲目とは、神があえて「見ない」ことで裁きを遅らせ、覆いを働かせ、愛と回復を進めるために置かれた奥義であり、終末の教会が立つべき位置を照らす光である。

I. 起点：アダムの視線の反転と覆いの喪失

聖書は、盲目を単なる裁きとしてではなく、創造から終末まで一貫して「覆い」としての救いの働きの中に置いている。アダムが自分の裸を自分の目で見たとき、人は神の覆いを失い、自分の判断で自分を裁く者となった。

アダムとエバの「目が開けた」とは、知識が増えたというより、神の視線の下で生きていた者が、自分の裸を自分の視線で見るとなったことを意味する。神の視線の中にある限り、裸であっても恥も裁きも存在しなかった。しかし蛇の誘惑によって神の視線を捨て、自分の判断で世界を見、自分の裸を自分で裁く者となった瞬間、恥と恐れと隠れるという墮落の徴が生じた。

主がパリサイ人に「あなたがたは見えると言っている。だから、あなたがたの罪は残る」と言われたのは、このアダムの構造を霊的に言い直したものである。自分の視線で自分を見ている者は、神が覆う余地を閉ざしている。

光を避ける者は、裸を見たアダムのように隠れる。しかし、神の呼びかけに応じて光に来る者は、神の覆いを受け、キリストに着せられて生きる。創世記の皮の衣は、この覆いの原型である。神はアダムの裸を「見ない」ことで彼を覆い、神の前に立つ道を開かれた。これは光に来た者に与えられる「救いの盲目」である。

なお光を避けて隠れている者に対しては、神は別の意味で「見ない目」をもって臨まれる。「あなたはどこにいるのか」と。それは裁きを遅らせ、悔い改めを待つための憐れみである。この「猶予の盲目」を通して、イスラエルと異邦が一つに造り上げられる。

覆いとは、神が見てくださるということである。神の視線の中にある者は裸であっても恥じず、裁かれず、守られる。しかし自分の視線で見るとは、神の覆いを拒み、他者をも自らをも裁く者となる。

II. 覆いと猶予の盲目の系譜：ノア・イサク・ヨセフ・主イエス

アダムの「見える」ことが覆いを失わせたのに対し、聖書に現れる盲目は、覆いと猶予を働かせるために置かれている。

ノアの裸とセム・ヤペテの盲目

ノアがぶどう酒に酔って裸をさらした出来事は、単なる失態として読むだけではなく、聖書が示す「弱さと覆い」の構造を学ぶための重要な光景として受け取ることができる。

ノアは洪水後の新しい創造の父として立てられたが、その直後に弱さをさらし、倒れ、裸を見られる危険の中に置かれた。この姿は、祝福のただ中で弱さが露わになるという、聖書全体に繰り返し現れるテーマを思い起こさせる。

そのとき、セムとヤペテは父の裸を「見ない」ことで覆いを働かせた。

彼らは顔を背け、後ろ向きに歩み、裸を見ずに覆った。

ここに、弱さの中にある者を覆い、恥を隠し、回復の道を開く「覆いの盲目」の原型が置かれている。

この光景は、終末の教会の弱さや眠りの問題を直接断定するものではないが、弱さが露わになったときに、覆いがどのように働くのかを学ぶための教えとして読むことができる。弱さの中で倒れた者が、覆いの働きによって再び立ち上がり、祝福の源としての位置を回復するという構造は、救済史全体に通底するテーマである。

II-1. イサクの盲目の意味

イサクが盲目であったためにヤコブを祝福した出来事は、単に「間違えて祝福した」という物語ではなく、神が導かれた霊的な真実が、盲目を通して実行された出来事である。

しかし同時に、この盲目にはもう一つの側面がある。イサクはエサウを愛していたが、盲目のゆえにエサウの姿を「見ず」、を裁くことも退けることもせず、愛し続ける時間が延ばされていた。

この構造は、見ないことで裁きを遅らせ、愛の時間を延ばす」という 猶予の盲目 の特徴を示している。

エサウは「肉の者」の象徴であり、その姿には、血統としては選ばれながら霊的には外に落ちたイスラエルの影が重ねられている。

そのエサウを見ずに愛し続ける盲目のイサクの姿は、主が肉のイスラエルをなお愛し、裁かず、猶予の中で愛し続ける父の姿が置かれている。

この意味で、イサクの盲目は 終末のイスラエルに与えられている猶予の盲目 の影となっている。

ローマ 11 章の「神は彼らを不従順の中に閉じ込めた」「神が彼らに深い眠りの霊を与えた」「彼らの目が見えないようにされた」と示されるイスラエルの盲目は、異邦人の満ちる時が来るまで、神が裁きを遅らせ、回復のための時間を与える「猶予」として働かせておられる。最後には全イスラエルが救われるためである。

II-2. ヨセフの「聞かないふり」

ヨセフが兄弟たちの罪を聞きながら「聞かないふり」をしたのも同じである。罪は知っている。しかし裁かず、悔い改めの時間を与え、最後に抱きしめて赦す。これは猶予の盲目の光景である。

II-3. 主イエスの盲目（覆いと猶予）

主イエスが目隠しされ、打つ者を「知らない者」として扱われたのは、敵を裁かず、覆いと猶予を働かせるためである。十字架の弱さの中で、主は世界の罪を見ず、覆いの中で赦しを宣言された。「彼らは自分が何をしているのか分からない」と祈られたこの盲目は、世界全体に与えられた猶予の盲目である。

III. 覆いと裁きの臨界点：主が見るとき裁きが動く

主が見るとは、覆いが外れ、裁きが確定する瞬間である。

ダビデが罪を隠していたとき、主が見られた瞬間、隠していたものは暴かれ、裁きと同時に悔い改めが生まれた。ペテロも同じである。主が振り向いて彼を見られた瞬間、心の真実が暴かれ、涙の悔い改めが生まれた。

IV. 覆いと猶予が交差する中心点：姦淫の女

姦淫の女の場合は、盲目の奥義の最深部である。主は女を見ず、地面に目を向けて書いておられた。罪は明らかである。しかし主は見ない。これは覆いであり、猶予であり、悔い改めの時間である。

同時に主は告発者たちの心を見られた。しかしその場で裁かれなかった。彼らは逃れた。これは裁きが終末に持ち越された猶予の盲目である。

V. 終末の教会の盲目：サムソンの盲目の意味

終末の教会は、サムソンと同じように肉性を帯び、誘惑に弱く、眠りやすい。愛が成熟に至らなければ、塩気を失い、世に対して何の価値もなくなる。しかし主は「目を覚まして祈れ」と言われ続けた。

サムソンの盲目は、肉の目が閉じられ、霊の目が開かれるための盲目である。肉のままでは御霊の業を行えない。肉が盲目とされ、十字架に釘づけられるとき、初めて愛が実行される。

サムソンは盲目になって初めて、自分の死を通して敵を倒し、民を救う「全焼の供え」の位置に立った。

これは終末の教会の型である。

肉の目が閉じられ、霊の目が開かれ、雅歌の花嫁のように主の愛に応える者となり、隣人を救う愛を顕す者となる。

そのとき、イスラエルは完全に回復され、花嫁は成熟した乙女として整えられ、神の憐れみの終局の光景が現れる。

§ 補足 3【細部の象徴】

— 誓願から献身へ、全焼から昇る救い、そして一体化へと至るその中心線を「逆転した影」として描くサムソン物語の象徴体系 —

序：象徴の読み方と中心線の確認

【主要引用】士師記 13-16 章

【補助引用】ローマ 11 章、エペソ 2 章、黙示録 19 章

サムソン物語の細部は、一見すると偶然の出来事や奇妙な行動に見える。しかし象徴として読むとき、これらの細部はすべて、誓願から献身へ、全焼から昇る救いへ、そして一体化へと至る奥義の中心線を「逆転した影」として描くために配置されたものである。サムソンの生涯は、誓願の子としての教会の影であり、外に落ちた者を愛する花婿の影であり、昇る救いの影である。彼の行動の細部はすべて、奥義の構造を象徴する意味を帯びていることを黙想できる。

I. 【補足：ダン部族 — 裁き・蛇・最後尾・救いを待ち望む者】

【主要引用】創世記 49:16-18（裁き・蛇・救いを待ち望む）／民数記 2:31（最後尾）／申命記 25:17-19（アマレクの攻撃）

【補助引用】箴言 31 章（悩む者の裁き）／出エジプト 4:8（後のしるし）／創世記 32 章（ヤコブの折れ）／ローマ 11 章（つまずきと回復）

【語彙根拠】ディン（裁き）／蛇（つまずき）／最後尾（弱者の保護）／後の日（救いの待望）

サムソンがダン部族から出たことは、象徴として読むべき重要な徴が含まれる。

ダンはその名が示すとおり「裁き（ディン）」を意味し（創 49:16）、イスラエルの中で特に「裁きと救いの境界」に関わる部族として描かれる。

出エジプトの旅路において、ダン部族は行進の最後尾を担った（民数記 2:31）。

それは単に「弱い部族だから後ろに回された」ということではない。

最後尾とは、行進の中で最も脆弱な位置であり、置き去りにされる者、疲れ果てて遅れる者、悩みや重荷を負って歩けなくなった者たちが集まる場所である。

ダンは、その最後尾を守る役割を担った。つまり、ダンは「悩む者」「遅れる者」「置き去りにされそうな者」を庇い、彼らを守るために立てられた部族であった。

一方で、ダンはやコブの預言の中で、「道の傍らの蛇」として描かれる（創世記 49:17）。

道の真ん中ではなく、「傍ら」。それは、イスラエルの歩みの中に潜む霊的葛藤、つまずき、横からの攻撃、見えにくい形で働く誘惑と混乱の象徴である。

ダン、イスラエルの歴史の中で最初に偶像礼拝の中心地となり（士師記 18 章、列王記上 12 章）、イスラエルをつまずかせる「最初の裂け目」となった。

この「道の傍らの蛇」という預言は、やがてイスラエルがキリストを拒絶し、つまずき、外に落ちるといふ歴史の影としても読むことができる。

しかし、ヤコブのダンに対する預言は、蛇のイメージで終わらない。

「ダンはその民を裁く」（創 49:16）という言葉の直後に、ヤコブは突然こう祈る。

「主よ、私はあなたの救いを待ち望む」（創世記 49:18）

この祈りは、文脈から見ると、ダンに対する預言の中に割り込むように置かれている。

まるで、ダンの名に込められた「裁き」と「蛇」と「つまずき」のただ中から、ヤコブ自身が神に向かって救いの祈りを懇願しているようである。

ここでの「救いを待ち望む」という祈りは、ダンの名に込められた「裁き」が、滅びの裁きという意味以上に、悩む者・つまずいた者・最後尾にいる者たちに対する神の公正な救いの約束であることを示している。

この「悩む者の裁き」は、箴言 31 章に描かれる「エシェット・ハイル（賢い妻）」の姿と重なる。箴言 31 章は、しばしば「信仰者の理想の妻」として読まれるが、その本質は「王の母が王に教える統治の責務」が描かれた章の中に配置され、賢い妻は、相応しい王の妻として、終末の教会の姿とも重ねて読むことができる。そこでは、王に対してこう語られる。

「悩む者の裁きを忘れてはならない」

箴言 31 章の女性は、「統治者の杖」を持つ存在としても描かれる。

彼女は力と気品を身にまとい、「後の日を笑って待つ」（箴 31:25）。

この「後の日を待つ」という姿勢は、ヤコブの「主よ、私はあなたの救いを待ち望む」という祈りと共鳴する。

ここで、「統治者の杖」とは、王としての責務、すなわち、悩む者・弱い者・最後尾にいる者たちを忘れず、彼らのために裁きを行うという使命である。

ダン部族の最後尾の位置は、この「悩む者の裁きを忘れない」という王の責務を、部族レベルで象徴していると言える。

ダンは、行進の最後尾に立ち、アマレクが襲った「疲れ果てて後ろにいる者たち」（申命記 25:17-19）を守るべき位置にいた。

アマレクは、神の民の最後尾、最も弱いところを狙う敵である。

そこに立つのがダンであり、そこに立つ者こそ、「悩む者の裁きを忘れない」統治者の杖の象徴である。

この構造は、終末の教会の使命と重なる。

教会は、主の代理者として「統治者の杖」を持つ者であり、終わりの日に向けて、残れる者、悩む者、最後尾にいる者たちに向き合う使命を帯びている。

主は、悩む者の訴えを決して忘れない。

問題は、教会がそれを忘れないでいられるかどうかである。

終末の主のしもべの愛の目覚め、主に相応しい者としての花嫁の整えは、「力の現れ」という以上に、悩む者の裁きを忘れない教会が立ち上がることと深く関わっている。

ここで、主の日の救いの後の物語として、ノアの物語が一つの対照として浮かび上がる。

ノアは救いを受けた後、ぶどう酒を飲んで酔い、裸をさらした（創世記 9 章）。

ノアは世界の贖いを象徴する大洪水を経て、新しい世界の父として立てられた。しかしその後、彼自身の平和の内で、ぶどう酒に酔い、裸の恥をさらした。ここには二重の象徴がある。ぶどう酒は祝福・喜び・実りを表す。しかしその祝福に酔い、使命を忘れ、裸の恥をさらした。これは、救われた者が救いの後に眠り、使命を忘れ、裸の恥をさらす危険を示す預言的光景である。

主イエスは最後の晩餐で「神の国で飲むその日まで飲まない」と誓願された。花婿である主は、花嫁が整えられ、誓願が成就するその時まで、ぶどうの実を口にしないと誓われたのである。この花婿が花嫁の整えを待つ誓願と、ノアの酔いは対照をなす霊的位置関係にある。つまりノアの酔いは、終末の教会が誓願を忘れ、眠り、裸の恥をさらす危険を象徴する。（→ 以下「補足3. X-2. 髪 — 誓願の徴・覆いの喪失・回復の徴」参照）

しかし、主は花嫁の愛が主の愛に応えることを待ち望みつつ戸をたたき、花嫁の整えを求められている。終わりの日の教会は、この花婿の誓願に応える形で、愛の目覚めが待たれる。主の祈りのゆえに、神の人は砕かれつつ、統治者の杖を持つ者として、悩む者の裁きを忘れない使命に再び目覚める。

出エジプト4:8に、「後の日のしるしを信じる」という言葉がある。

不信仰なイスラエルは最初のしるしを信じないかもしれないが、「後のしるし」を見て信じるようになる、と主は言われる。この「後のしるし」は、悩む者たちの救いにおいて、神が後の日に働かれる希望を示す徴である。

モーセの手がらい病になり、再び元に戻るという第二のしるしが後のしるしであった。ここには、人が自分の汚れと罪深さに直面せざるを得ない状況が象徴として描かれている。らい病となり、しかし回復するという徴は、罪がいかに絶望的であっても、神がその汚れをきよめ、イスラエルを回復させる力を持っておられることを示している。

これは、悩む者・最後尾にいる者・つまずいた者に対する、神の回復の御意志の徴である。

肉にあるイスラエルは、キリストを拒絶した。その結果、彼らは悩む者となり、深淵の中で苦しむ者となった。しかし主ご自身は、彼らを決して忘れておられない。

むしろ、終末の教会に向かって、「その訴えを決して忘れるな」と求めておられる。

「主よ、あなたの救いを待ち望む」という祈りは、単にヤコブ個人の祈りではなく、イスラエルの回復と終末の救いに向けた、神ご自身の御心の表現である。

箴言31章の「後の日待つ」女性(エシェット・ハイル)、創世記49章の「あなたの救いを待ち望む」ヤコブ、出エジプト4章の「後のしるし」、そしてダン部族の最後尾の位置と「裁き(ディン)」という名。これらはすべて、悩む者・最後尾にいる者・つまずいた者のために、神が後の日に働かれる救いを待ち望む姿勢を、さまざまな角度から示している。

サムソンはダンから出た誓願の子として、つまずきと葛藤のただ中から立ち上がり、悩む者の裁きと救いの境界に立つ者として召された。そしてダンには悩む者を庇う者であると同時に、自らも悩む者であり、救いを待つ者であるという二重性がある。弱さの中で整えられる終末の教会の姿とも重なり、誓願の子が自らの弱さを負いつつ、悩む者のために立つというサムソンの生涯とも重なる。

そして終末の教会もまた、ダンの名に込められた「裁き」と「救いを待ち望む祈り」を受け、統治者の杖を持つ者として、最後尾にいる者たちを忘れない使命を帯びていると黙想できる。

なお、ダン族には偶像礼拝・蛇・黙示録における除外など、別の象徴領域が存在するが、これらは「背教の教会」や「拒絶のイスラエル」といった別の主題に属するため、本稿の焦点である「誓願の子としての教会の整え」とは異なる象徴領域であり、ここでは扱わない。

II. 【補足：獅子と蜜 — 強い者の裂かれと誓願の子の誕生】

【主要引用】士師記14:5-9

【補助引用】創世記49:9（ユダ族＝獅子）／マタイ11:12（神の国は強奪されている）／マルコ3:27（強い者を縛る）／ローマ11章（つまずきと憐れみ）／詩篇19:10（律法＝蜜）

サムソン物語の象徴体系の中で、最も深く、物語全体の中心に置かれた謎がある。

「食う者から食物が出、強い者から甘い物が出た」。

獅子の死体の中に蜜があるという光景は、旧約の象徴語彙を凝縮した逆転の奥義であり、誓願から献身へと至る中心線の最初の転換点として置かれている。

獅子は旧約においてユダ族の象徴であり（創 49:9）、律法の座、神の民の母体、契約の中心を表す。

サムソンが出会った獅子は、第一義にはユダヤ母体としてのイスラエル、律法の座にある民の象徴として黙想できる。

しかしその獅子は、誓願の子によって裂かれ、死の中に置かれる。

これは、イスラエルが律法の座にありながらつまずき、盲目となり、外に落ちるというローマ 11 章の構造を影として示す。

強い者が裂かれ、死の中に置かれるという逆転は、律法の時代の終わりと、イスラエルの裂かれの象徴である。

この「強い者が裂かれる」という象徴は、主イエスが語られた難解なたとえ——「まず強い者を縛り、その家を略奪するのである」（マルコ 3:27）——と関係するように思われる。

主イエスの言葉における「強い者」は第一義的にはサタンを指すが、文脈は律法学者との論争であり、律法の座にあるイスラエルの宗教的中心もまた象徴的に含まれている。

つまり、強い者が縛られる／裂かれるという構造は、律法の座の力が終わり、その中から神の国の財産——律法の本体——が現れるという逆転の奥義を示している。

この逆転は、主イエスが語られたもう一つの難解な言葉、

「ヨハネの日以来、天の御国は激しく攻められており、激しく攻める者たちがそれを奪い取っている」（マタイ 11:12）とも接続している。

神の国が「奪われる」という表現は、象徴的に二方向に読める。敵が奪おうとするという意味にも、悔い改める者が命をかけて神の国を「奪い取る」という意味にも読める。象徴が二重に働くのは、神の国が逆転によって到来するからである。

旧約の象徴はしばしば、「裁かれたイスラエル」と「裂かれたキリスト」を同じ像の中に重ねる。

獅子の裂かれもまた、イスラエルの裂かれ（歴史的影）と、キリストの裂かれ（本体）の双方を含む多層的象徴として読むことができる。

イスラエルの裂かれは、キリストの裂かれの「歴史的母体」であり、キリストの裂かれはその「成就」である。

影と本体が一つの像の中で重なり、誓願の子の誕生の奥義を示している。

蜜は旧約において神の律法の甘さを象徴する（詩篇 19:10）。

しかしサムソンが見た蜜は、律法の影ではなく、裂かれたイスラエルの中から現れた「律法の本体」である。律法の本体とは、キリストの愛であり、パウロが「キリストの律法」と呼んだもの（ガラテヤ 6:2）。律法の影が終わり、その中心にあった愛が、裂かれたイスラエルと裂かれたキリストの双方から誓願の子に与えられる。

蜜は、律法の完成としての愛、花婿の甘さ、御霊の甘さを象徴する。

誓願の子であるサムソンは、裂かれた獅子の中から蜜を取り、それを食べる。

これは、誓願の子＝終末の教会が、裂かれたイスラエルから「律法の本体」を受け取るという象徴である。教会は律法の影ではなく、律法の中心にあった愛を受け取り、その甘さによって

生かされる。誓願の子は、裂かれた母体から与えられた甘さによって育てられ、献身へと導かれる。

さらにサムソンは蜜を父母にも与える。

これは、誓願の子が受け取った「律法の本体」を、自らの母体であるイスラエルに返すという象徴である。父母がその蜜の由来を知らなかったことは、イスラエルが「律法の本体」をまだ識別できないという盲目の象徴である。

ローマ 11 章が語るように、イスラエルは異邦の満ちる時まで部分的にかたくなにされている。しかし、その盲目のただ中に置かれた甘さこそ、やがて彼らを回復へ導く憐れみの前触れとなる。

ローマ 11 章の奥義——「異邦の満ちる時に、イスラエルは憐れみに閉じ込められる」——がここに影として置かれている。誓願の子（教会）が愛の律法を受け取り、その愛をもってイスラエルを覆い、イスラエルは憐れみによって回復される。

蜜は、イスラエルの回復のための神の愛（甘さ）、一体の奥義の前触れとして置かれている。

こうして、獅子と蜜の象徴は、誓願から献身へ、裂かれから憐れみへ、イスラエルから一体へ、そして昇る救いへと至る中心線の最深部の逆転構造を描く。

獅子が裂かれ、蜜が現れ、誓願の子がそれを食べ、父母に返すという流れは、旧約の影としての救済史の中心を凝縮した象徴として読める。

この「獅子と蜜」の謎かけそのものが、サムソン物語全体の読み方を示す「鍵」として置かれている。この謎は、物語全体が従うべき逆転の構造——死から命が生まれ、裂かれから甘さが現れ、つまずきから回復が始まるという救済史の中心線——を最初に提示する導入の徴である。聖書はあえてこの謎を物語の入口に置くことで、文学的に読んでも、象徴的に読んでも、救済史的に読んでも、必ず同じ中心——逆転の奥義——へ導かれるように設計している。謎かけは、物語全体が展開する「答えそのもの」を先に提示する役割を果たしている。つまり、サムソン物語は、「食う者から食物が出、強い者から甘い物が出た」という逆転の奥義を物語全体で象徴として描き出す構成となっている。謎かけは、文学的仕掛けというより、御霊が読者を中心線へ導くための「霊的な鍵」として置かれていると黙想できる。聖書は、御霊の導きと文学的構造の双方によって、同じ中心——逆転の奥義——の理解を保証していると思われる。

Ⅲ. 花嫁の整えの影（士師記 14 章） — 晴着十着と破れた婚宴の象徴

【主要引用】 士師記 14:12-13（晴着十着）

【補助引用】 ルツ記 3:9（衣をかける）・エゼキエル 16:8-14（花嫁に衣を着せる）・黙示録 19:7-8（花嫁の衣）【語彙根拠】 衣=契約・身分・花嫁の整え（旧約全体の象徴語彙）

「花嫁の整えの影」「律法下では完成しない婚宴の破れ」が描かれている。

士師記 14 章でサムソンが求めた晴着十着は、賭けの景品のように描かれるが、その象徴は旧約において衣服は常に、身分・契約・花嫁の整えと関係していた。

ルツはボアズの足元で衣をかけてもらい、エゼキエル 16 章で神は花嫁に衣を着せ、黙示録 19 章で花嫁は光り輝く衣を着る。衣とは、花嫁の整えに関する。

サムソンが求めた晴着十着は、本来イスラエルが着るべき花嫁の衣であった。しかしイスラエルは花婿を拒絶し、その位置に異邦が立ち、さらにその異邦の花嫁も裏切りによって破れる。

晴着十着は、破れた花嫁の整えの象徴として置かれた。これは奥義の影がまだ完成していないことを示す逆転した徴である。

晴着十着は花嫁の整え・契約・身分を示し、救済史では、破れた花嫁は異邦の花嫁そして、一体の奥義を表す。

IV. 裁きと救いの境界（士師記 15:4-5） — ジャッカルの尾の火と焼かれたぶどう畑

【主要引用】 士師記 15:4-5（ジャッカル・たいまつ・焼かれた畑）

【補助引用】 イザヤ 5:1-7（ぶどう畑＝イスラエル）・詩篇 80:8-16（ぶどうの木＝イスラエル）・マタイ 21:33-43（ぶどう園の譬え）・出エジプト 22:6（立ち穂＝償い・責任）

【語彙根拠】 立ち穂（הקֶמֶחַ）＝誓い・償い・責任・たいまつ（תִּיבְּרָה）＝ゼカリヤ 12:6、イザヤ 62:1・ジャッカル（בַּדְּוָיִם）＝荒野・外に落ちた者の象徴

ぶどう畑は旧約において常にイスラエルの象徴である。（イザヤ 5 章、詩篇 80 篇、マタイ 21 章）

サムソンがジャッカル三百匹の尾にたいまつを結びつけ、ペリシテの麦畑（立ち穂）を焼いた。物語では復讐であるが、どのような意味が隠されているのか。

立ち穂（הקֶמֶחַ）」という語は、出エジプト 22:6（ヘブライ語 22:5）と同じ語彙。「もし火が燃え広がり、立ち穂や畑を焼いたなら、その火をつけた者は必ず償わなければならない。」という文脈で、「償う（סָפַד）」ということば、誓い・義務・責任を果たすという強い語彙で出てくる。立ち穂が焼かれるという行為は「誓いの責任」「償い」「義務の履行」という文脈を持つ。この焼かれた立ち穂は、誓い・責任・償いという聖書の象徴を帯びていた。サムソンの行為は、律法下の「届かない誓願」「破れた責任」「果たされない償い」を象徴する影となる。

ペリシテの畑、しかしもともと地理的にはイスラエルの嗣業の地であるが、支配はペリシテにあり、実りはペリシテのものとして扱われている。ねじれの光景の中で、その畑が焼かれたという光景は、イスラエルの破れが異邦の地に映し出されるという逆転した姿——イスラエルが本来の位置（花嫁の位置）から外に落ちている状態を象徴的に示される。

つまり、焼かれた立ち穂は、誓い・責任・償いというテーマを帯びており、誓願の子の物語の中に置かれた「誓いの破れ」「果たされない責任」の象徴として読むことができる。

ジャッカル（בַּדְּוָיִם）は荒野の獣であり、外に落ちた者、イスラエルの破れ、異邦の影を象徴する。

たいまつ（士師 15:4）＝ゼカリヤのたいまつ（ゼカリヤ 12:6）＝終末の火の象徴

ゼカリヤ 12 章の「たいまつのように燃えるエルサレム」

イザヤ 62:1 の「救いがたいまつのように燃える」

たいまつ（תִּיבְּרָה）はゼカリヤ 12 章・イザヤ 62 章の語彙と同じで、終末の火・救いの火・回復の転換点を示す。

「火をつける」（בָּעַר）は、燃え尽くす・除き去る（士師 15:5）

こうして焼かれる麦畑は、神の手に実りでないものが除き去り、主の裁きの火によって神のエルサレムが回復される姿を描く。

偽りの除去、不純物の除去、裁きによる浄化、神殿の清め、終末の裁きを象徴する。

破れの中で異邦が満ち、苦難の中でなお残りの者を残され、やがてイスラエルが憐れみに閉じ込められるというローマ 11 章の中心線が、逆転した影としてここに置かれている。

V. 奉献と碎かれることの象徴（士師記 15:8）

— 脛と腿：祭司の奉納物とヤコブの碎かれたこと

【主要引用】 士師記 15:8（脛と腿）

【補助引用】 出エジプト 29:22（祭司の奉納物＝腿）・レビ記 7:32-34（祭司の取り分＝腿）・創世記 32:25（ヤコブの腿が打たれる）

【語彙根拠】 shoq（脛）＝奉献・yarek（腿）＝折れ・召し・弱さの象徴

サムソンが「脛と腿」を打ったという描写は、激しさを表す表現であるとともに、祭司的奉獻と、ヤコブの碎かれたことが一つに重ねられた象徴として読むことができるものでもある。

脛（*piw* shoq）は、出エジプト記・レビ記で繰り返し、祭司に与えられる「奉納物の部位」として指定される。

「あなたは、雄羊の脂肪と…右の腿を取り、それを主の前で揺り動かしのささげ物としなければならぬ。」（出 29:22）

ここで腿は、祭司に与えられる「取り分」であり、神と民との間に立つ者の分け前＝奉仕と奉獻の象徴である。

一方、腿（*yarek*）は、創世記 32 章でヤコブが打たれた場所であり、

「そのとき、彼はヤコブの腿の関節を打ったので、その関節が外れた。」（創 32:25）

ここでは、肉の力が折られ、祝福を受ける者としての新しい名を与えられる場面として描かれる。

この二つの語彙がサムソンの一撃の中で重ねられていることは、誓願の子の道において、祭司的奉獻（神と民の間に立つ奉仕）と肉の力の碎かれること（ヤコブのように、祝福の前に打たれる）とが切り離せない一つの出来事であることを示しているように思われる。

終末の教会もまた、「奉仕の力」を帯びる前に、「ヤコブの腿」が打たれる。

誓願の子として立つ者は、まず自分の力で立つことをやめさせられ、その碎かれた場所で初めて、祭司的な取り分——「脛と腿」に象徴される奉獻の位置——を受け取る。

サムソンが打った「脛と腿」は、敵の力を砕く一撃であると同時に、誓願の子自身が通るべき奉獻と碎かれた人の道の影として読むことができる。

誓願の道は、神の前に碎かれた魂が、そこから献身の完成へと向かう道筋である。

VI. 岩に隠れる誓願の子（士師記 15:8）

【主要引用】 士師記 15:8（岩に身を置く）

【補助引用】 出エジプト 17:6（岩から水）・詩篇 18:2（主は岩）・1コリント 10:4（岩＝キリスト）

士師記 15 章で、サムソンはペリシテを打った後、「エタムの岩の裂け目」に身を置く。

ここには、誓願の子が「岩」であるキリストの裂け目に隠れる姿を見ることができる。

パウロは、荒野の岩について「彼らが飲んだ霊的な岩からの飲み物…その岩はキリストでした。」（1コリ 10:4）と語った。

サムソンは、自分の力で敵を打った直後に、自分の力ではなく「岩」に身を置くところに導かれる。誓願の子は、敵を打つ力を与えられながらも、その力の源を自分に帰さず、裂け目の中に身を沈めた。

これは、終末の教会が、靈的な戦いの只中でなお、自分の働きの成果ではなく、裂かれたキリストの中にその魂を生かす源泉があることを示している。

岩の「裂け目」は、モーセが主の栄光を見た場所でもある（出 33:22）。

誓願の子は、裂け目に隠されることで、初めて神の栄光を見る者とされる。

また、裂け目とは、キリストの裂かれた脇腹の影でもある。

サムソンが岩に身を置いたのは、誓願の子が「裂かれたキリストの中に命を置く者」であることを示す象徴である。誓願の子の御霊の力の現れが、キリストの命の業に身を置くことによって、魂を回復し、栄光に与るものとされる徴であることを覚えることができる。

Ⅶ. 義の者の縛りととりなしの誓い（士師記 15:10-13） — ヨセフ・シメオン・エレミヤの語彙場

【主要引用】 士師記 15:10-13（サムソンが縛られる）、15:12（「誓え」）

【補助引用】 創世記 42:24（シメオンが縛られる）・創世記 39-40章（ヨセフが縛られる）・エレミヤ 37-38章（エレミヤが縛られる）・イザヤ 53:12（とりなし=וַיִּגַּד）

【語彙根拠】 「縛る」=義の者の苦難 → 救いの前段階、誓い=とりなしの語彙場・誓願の子=民のために立つ者

士師記 15章で、ユダの人々はサムソンを責め、「私たちはあなたを縛ってペリシテ人の手に渡す」と言う。サムソンはそこで一つの条件を出す。

「あなたがたが私に打ちかかれないと誓うなら…」（士 15:12）

ここには、義の者が自ら縛られることを受け入れつつ、民のために「とりなしの条件」を置く姿が刻まれている。

旧約で「縛られる義の者」は、ヨセフ・シメオン・エレミヤに繰り返し現れる。ヨセフは、兄弟たちの罪のただ中で縛られ、そこから飢饉の救いが始まる。シメオンは、兄弟たちの保証として縛られ、残りの者の帰還のための「担保」とされる。エレミヤは、民の不信仰の中で縛られ、なお神の言葉を語り続ける。

サムソンもまた、民の罪と恐れのただ中で、自ら縛られることを受け入れる義の者として立っている。彼が求めた「誓い」は、自分の身の安全確認ではなく、「あなたがたが私を打たない」=誓願の子に向けられる怒りを、民が自分たちの手で完結させないこと、「私を渡すだけだ」=裁きと救いの決着を、神ご自身の手に乗ねることとを求める、とりなしの条件である。

ここで使われる「誓う」という語は、イザヤ 53章の「とりなし」（וַיִּגַּד）と同じ語彙場に属する。

「彼は多くの人の罪を負い、とりなしをした。」（イザ 53:12）

誓願の子は、民の恐れと敵の圧力の間に立ち、自ら縛られることを受け入れつつ、裁きが民自身に向かわないように「誓い」を求める者であった。

Ⅷ. 裂かれた地と水（士師記 15:19） — 霊の回復・悔い改め・終末の立ち返り

【主要引用】 士師記 15:19（地が裂け、水が出る）

【補助引用】 創世記 7:11（大水の源が裂ける）・出エジプト 14:21（海が裂ける）・民数記 16:31（地が裂ける=裁き）・ヨハネ 19:34（裂かれた側から水）

【語彙根拠】 「霊が生き返る（חַיָּה）」=悔い改め・立ち返り

サムソンが渇きの中で叫んだとき、「神はレヒにあるくぼんだ所を裂かれたので、そこから水が湧き出た。…彼の霊は生き返った。」（士 15:19）

ここには、裂かれた地から命の水が湧き出るといふ、救済史の中心的な光景が凝縮されている。創世記 7 章で「大いなる淵の源が裂けた」とき、大水は裁きとして溢れ出た。出エジプト記 14 章で海が裂けたとき、イスラエルには救い、エジプトには裁きが現れた。民数記 16 章で地が裂けたとき、コラの反逆は裁かれた。

サムソンの場面では、同じ「裂ける出来事」が、裁きではなく、渇いた誓願の子のための水の源として開かれる。

ここで「彼の霊は生き返った」と言われる「生き返る（שׁוּב shuv）」は、「立ち返る」「悔い改める」と同じ語族であり、外部の状況が変わったのではなく、誓願の子の内側が、裂かれた地から湧き出る水によって立ち返らされたことを示している。

この水は、ホレブの岩から出た水、そして十字架で裂かれたキリストの脇腹から流れ出た水と同じ象徴の上にある。

誓願の子は、自分の渇きと弱さの極みにおいて、裂かれた岩から流れる水を飲むことで、再び誓願の道に立ち返る。

終末の教会の立ち返りもまた、外面的な改革ではなく、裂かれたキリストから流れる水を飲むことによって起こる霊の回復である。

サムソンの「霊が生き返った」という一文は、ローマ 11 章の「イスラエルは憐れみに閉じ込められる」という終末の立ち返りに先立つ、とりなす者の立ち上がりとして読むことができる。

Ⅷ. 新しい綱（士師記 15:13） — 五旬節・初穂・御霊の時代の象徴

【主要引用】 士師記 15:13（新しい綱=hadashim）

【補助引用】 民数記 28:26（新しい穀物の捧げもの=五旬節）・出エジプト 22:6（立ち穂=償い）

【語彙根拠】 hadashim=新しい・初穂・五旬節語彙・五旬節=御霊・初穂・新しい民
士師記 15:13 の「新しい綱」は、ヘブライ語で hadashim（新しい）が使われている。

この語彙は、民数記 28:26 の「七週の祭り（五旬節）」の「新しい穀物の捧げもの」と同じ語族である。

つまり、サムソン物語の中には、新しい綱（hadashim）、新しい穀物の捧げもの、立ち穂（נֶחֱמָה）、誓い・償い（נֶחֱמָה）など、五旬節（七週の祭り）の語彙が散りばめられている。

これは、旧約でも新約でも「御霊の時代の始まり」を象徴し、主の花嫁の教会——イスラエルが憐れみに閉じ込められるという一体の奥義の完成を求める。

五旬節は、初穂、新しい民、異邦の満ちる、教会の誕生、御霊の注ぎ、一体の奥義の始まり——つまり（終末の）教会の象徴である。

新しい綱（hadashim） 民数記 28:26「新しい穀物の捧げもの」（五旬節）

立ち穂（נֶחֱמָה） 出エジプト 22:6「立ち穂を焼いたなら償わなければならない」

これは、誓い・償い・責任（誓願の語族）

麦（穀物） 五旬節は「麦の収穫祭」

つまり、サムソン物語の周囲に五旬節（御霊の注ぎ・初穂・新しい民）の語彙が密集していることは偶然ではない。サムソン=誓願の子=御霊を受ける者というテーマを語彙レベルで補強していると思われる。

X. 髪 — 誓願の徴・覆いの喪失・回復の徴

【主要引用】士師記 16:17-22

【補助引用】民数記 6章（ナジルの誓願）／1コリント 11:15（髪＝栄光）／ローマ 11章（回復）

【語彙根拠】נִזְרָא（ナジル＝分離・聖別）／נֶזֶל（ネゼル＝冠・栄光）／נִדְּבָא（覆い）

サムソン物語の象徴体系の中で、最も誤解されやすく、しかし最も中心に位置する細部が「髪」である。

髪はナジル人の誓願の徴であり、誓願の子の存在そのものを形づくる象徴であるが、その意味は単なる禁欲規定ではない。髪は、誓願から献身へ、破れから回復へ、そして花嫁の整えへと至る中心線を可視化する徴として置かれている。

X-1. 髪＝誓願の徴・神に委ねられた時間（民数記 6章）

ナジル（נִזְרָא）の語源は「分離された者」「神に捧げられた者」であり、同じ語根から נֶזֶל（ネゼル）＝冠・栄光 が生まれる。

ナジル人の髪は「神の栄光の冠」であり、誓願の可視化である。

髪は自分で整えることができず、刃を当てて形を作ることも許されていない。

髪は、誓願の子が自分の時間を自分のものとせず、神が時間の中で形づくるものであり、ここでは、愛のかたちに向かうべきものである。

誓願の子は、髪を通して「神に委ねられた時間」を身に帯びる。

X-2. 髪＝覆い・花嫁の栄光（1コリ 11:15）

パウロは「女にとって髪は栄光である。」と語った。

旧約・新約を通して、髪は「覆い（נִדְּבָא）」の象徴語彙に属し、覆いは常に、花嫁の栄光、契約のしるし、愛の覆いを意味する。

したがって、サムソンの髪は誓願の子＝花嫁の影としての栄光の徴である。

誓願の子は、髪を通して花嫁の愛の覆いの下に立つ存在である。

X-3. 髪が剃られる＝誓願の喪失・覆いの喪失・花嫁の喪失（士師記 16:19）

サムソンが眠りの中で髪を剃られたとき、誓願の喪失・覆いの喪失・花嫁のかたちの喪失を象徴する。誓願に生きているとき、彼は聖霊の力を帯びた。しかし、誓願のしるしを失ったとき、力も失った。主が彼と共におられなかったからである。

眠りは霊的酔い、油断、愛の冷えの象徴であり、ラオデキヤの「あなたは裸である」という光景と同じ象徴領域に属する。主はその教会の戸の外に立ってたく方として、彼らの中にはおられなかった。

髪の喪失は、誓願の子が花嫁の位置から外に落ちる光景を思わせる。

これは、外に落ちたイスラエルの霊的状態——覆いを失い、盲目となり、花嫁を拒んだ民——の姿とも重なる。しかし、愛する者として受けた懲らしめの中で、悔い改めが求められ、それに応えるのが神の教会の姿でもある。

ノアは救われた後、ぶどう酒によって酔い、裸の恥をさらした。救われた者が、ぶどうの実の杯によって眠り、覆いを失い、裸の恥をさらすという光景は、誓願の子が救いの後に霊的に眠り、覆いを失うという象徴として読むことができる。ノアの裸の恥は、誓願の喪失の原型であり、救われた者が覆いを失うという「誓願の子の眠り」の最初の影である。

ラオデキヤの教会は、「あなたは裸である」と告げられた。これは終末の教会が誓願の覆いを失い、花嫁のかたちを失い、霊的酔いと眠りの中で裸の恥をさらす姿である。ノアの裸の恥が救いの後の眠りの象徴であるなら、ラオデキヤの裸の恥は終末の眠りの象徴であり、誓願の子が覆いを失った状態の極みである。

サムソンの断髪は、この二つの裸の恥を結ぶ第三の象徴である。髪が剃られたとき、誓願の子は覆いを失い、花嫁のかたちを失い、裸の恥をさらす者となる。ノアの酔いと裸、ラオデキヤの眠りと裸、サムソンの眠りと断髪は、すべて同じ中心線——誓願の喪失、覆いの喪失、花嫁の喪失——を象徴していると考えられる。

X-4. 髪が再び伸びる＝誓願の回復・覆いの回復・花嫁の整え（士師記 16:22）

暗闇の静けさの中で次の一文が置かれている。「しかし、彼の髪は切られた後、再び伸び始めていた。」この一文は、誓願の回復が人の努力ではなく神の憐れみによって起こることを示し、イスラエルがローマ 11 章の啓示において、憐れみに閉じ込められるという御旨に先立つ、教会の回復の光景として読むことができる。ノアの裸の恥は覆いによって覆われ、ラオデキヤには「白い衣を買って身に着けなさい」と告げられ、サムソンには髪が再び伸びる。この三つの回復は、誓願の子が覆いを失っても、神が覆いを回復されるという救済史の中心線を示している。

終わりの日に果たして地上に信仰が見られるだろうか。誓願の子である教会は、誘惑に陥らないで目を覚ますように求められた。肉の者のようであるとき、眠りと弱さの中で覆いを失うが、神は髪を伸ばし、花嫁の整いを回復させ、花嫁のそして主の誓いを自身の内に回復させ、献身の完成へと導かれる。髪は誓願の子の歩みを時間、覆い、栄光、愛、回復という象徴語彙で結びつける中心の徴として働き、ノア、ラオデキヤ、サムソンという三つの裸の恥の物語を一つの回復の線として結ぶ。

サムソンの伸ばされた髪は、終末の花嫁が整えられ、花婿の愛に応える者として立ち上がる日の影であり、誓願から献身へ、破れから回復へ、そして昇る救いへと至る一本の線を象徴として結ぶために物語の最深部に置かれた徴であると受け止められる。

XI. 姉と妹の象徴（士師記 15:2） — サマリヤとエルサレム、イスラエルと異邦

【主要引用】 士師記 15:2（姉と妹）

【補助引用】 エゼキエル 23 章（姉妹＝サマリヤとエルサレム）・エゼキエル 37:15-28（二本の棒＝一体化）・ローマ 11 章（外に落ちたイスラエルと異邦の満ちる時）

【語彙根拠】 「良い (טוב)」＝後の者が先になる逆転の語彙

姉と妹——妹の方がきれい(良い (טוב) トーブ)ではありませんか、というやりとり。

「姉と妹」は「サマリヤとエルサレム」、「イスラエルとユダ」、「教会とイスラエル」という象徴を映したテーマ。

この姉妹構造がサムソン物語の象徴体系と関係する。

「姉と妹」という象徴は、旧約で「二つの民の関係」を示す型。

旧約で「姉と妹」が出てくるとき、二つの民・二つの契約・二つの位置を象徴する。

代表的なのはエゼキエル 23 章：姉：オホラ＝サマリヤ（北イスラエル）と妹：オホリバ＝エルサレム（ユダ）。ここでこの構造、姉＝先に墮落した民、妹＝後に墮落した民。しかし妹の方が「良い（טוב）」とされる逆転が起きる。

この「良い（トープ）」という語彙が、サムソン物語の語彙と関係する。

この姉妹関係は、救済史の中心線。旧約の姉妹関係は、常に次のテーマを扱う。

- ① 先に選ばれた者（姉）が外に落ちる。北イスラエル、サマリヤ、律法の民、血統としてのイスラエル。
- ② 後に選ばれた者（妹）が「良い（トープ）」とされる。ユダ、エルサレム、教会、異邦の花嫁。
- ③ しかし最終的には二つが一つにされる。エゼキエル 37 章の二本の棒、ローマ 11 章の「全イスラエルが救われる」、エペソ 2 章の「一つの新しい人」。

つまり、姉妹構造は「外に落ちたイスラエル」と「後に選ばれた異邦」という救済史の逆転構造を象徴し、最終的に一体となる御旨を描くサムソン物語で扱っているテーマそのものである。

サムソン物語の「異邦の女」は、この姉妹構造の「逆転した影」であり、サムソンが愛した異邦の女は、異邦一般のことではなく、外に落ちたイスラエルの影として読むこととなる。

エゼキエル 23 章の姉妹関係と一致する。

- ・ 姉（サマリヤ）＝外に落ちたイスラエル、妹（エルサレム）＝後に選ばれる民
- ・ 異邦の女＝外に落ちたイスラエルの象徴
- ・ 教会＝後に選ばれる民（妹の位置）

サムソン物語の「異邦の女」は、姉妹構造の姉の位置にある。そして、誓願の子（サムソン＝教会）は、妹の位置の側面を持つ。

「妹の方が良い（トープ）」という語彙は、終末史観と連関する。「妹の方が良い（טוב）」という語彙は、「後に選ばれる者が良い」という逆転の奥義を示す。

天の御国は、「後のものが先になり、先のものが後になる」と主は語られ、救済史は、先に選ばれたイスラエルがつまり、異邦が満ちることを語る。異邦が「良い（トープ）」とされる。しかし最終的にはイスラエルが憐れみに閉じ込められる。二つが一つの花嫁となるというローマ 11 章の御言葉を実現する。

XII. 盲目の象徴（士師記 16:21） — 肉の目が閉じ、霊の目が開く

【主要引用】 士師記 16:21（サムソンの盲目）

【補助引用】 創世記 3:7（アダムの目が開く）・創世記 27 章（イサクの盲目）・イザヤ 42:7（盲人の目を開く）・福音書の受難（主イエスの目隠し）

サムソンの盲目には二面性がある。

イスラエルの頑なさの象徴であると同時に、誓願の子が肉の力を失い、霊の力によって立ち上がるための「裂かれた側」の象徴である。

サムソンが両目をえぐられた出来事は、罰として読むのではなく、肉の判断が閉じられ、神の視線に戻されるための盲目として読むべきである。

アダム以来、人は「自分の裸を自分の目で見る」者となった。

しかし盲目は、自分の判断から神の視線へ戻され、神が赦されたものを赦し、神が愛されたものを愛するという霊的転換を象徴する。

キリストもまた目隠しされ、殴られ、嘲られた。

盲目は、誓願の子が肉の力を失い、霊の力によって献身を完成させるための裂かれた側である。

象徴索引との統合：

- ・盲目＝肉の判断の終わり → 霊の視野の始まり
- ・旧約の並行：アダムの目、イサクの盲目、主イエスの目隠し
- ・救済史：肉の力の終わり → 霊の力の始まり

XIII. サムソンの死（士師記 16:30） — 昇る救いの影

【主要引用】 士師記 16:30（サムソンの死）

【補助引用】 士師記 13:19-20（全焼の供え物と炎の中に昇る主の使い）・レビ記 1章（全焼＝昇るもの＝オラ）

サムソンの最後の祈りは、誓願の子の道がどこに向かっていたのかを、最も凝縮された形で示している。

「主なる神よ、どうか私を思い出してください。…この一度だけ私に力を与えてください。」（士 16:28）

彼は、自分の目の復讐を求めつつも、その死によってイスラエルに救いがもたらされる位置に立つ。

「彼が死ぬときに殺した者は、生きている間に殺した者よりも多かった。」（士 16:30）

この「死による勝利」は、士師記 13章であらかじめ示されていた光景——

「主の使いは祭壇の炎の中に昇っていった。」（士 13:20）の成就として読むことができる。

全焼のいけにえ（オラ）は「昇るもの」であり、完全に焼き尽くされて神に受け入れられる献げ物である。

誓願の子の誕生の場面で、主の使いがその炎の中に昇ったとき、誓願の本体——献身が昇る愛として神に受け入れられること——が先に啓示されていた。

サムソンの死は、この誓願の本体が、歴史の中で影として結ばれた瞬間である。誓願に始まった生涯が、盲目と弱さを通り、最後に自らを差し出す献身として昇り、その一点で、敵の滅びとイスラエルの救いと神の勝利が同時に現れる。

終末の教会の献身もまた、見えないところでの「昇る献げ物」としての明け渡しの中で果たされる。

サムソンの死は、誓願から献身へ、裂かれから憐れみへ、一体から昇る救いへと至る中心線が、旧約の中で最も鮮明に影として描かれた光景として黙想できる。

XIV. マノアの主（御使い）と全焼の供え物（士師記 13章）

— 誓願の本体の啓示：炎の中に昇る御使い

【主要引用】 士師記 13:15-23（全焼の供え物と炎の中に昇る主の使い）

【補助引用】 レビ記 1章（全焼の供え物＝「昇るもの」）・創世記 22:6-14（献げ物と代替の子羊）・ヘブル 13:15（献身のいけにえ）

【語彙根拠】 「昇る（נָסַח）」＝全焼の供え物の語彙・「誓願（נִשְׁוָה）」＝分離・献身・神への捧げ物

サムソンがナジル人であり、誓願によって生まれた者、誓願の子であること。そして、士師記13章で、なぜ主の使いは炎の中に昇るのか、なぜ全焼の供え物の時だけ姿を現すのか、なぜマノアは恐れ、「死ぬのではないか」と言うのか、なぜ誓願の子の誕生と結びついているのか。

その主の預言が御使いを通して現れたことのなかに、どのような主の御計画があったのか、「マノアの主（御使い）を見た光景と、全焼のいけにえと炎の中に昇る姿の意味」について、全焼の供えが、「昇るもの」（オラ）であること、主の使いが炎の中に昇る＝「誓願の本体の啓示」であること、誓願とは、献身が神に受け入れられ、天に昇る愛であること、サムソンの誕生は、この誓願の本質を起点としていたことを考えた。

誓願 → 全焼 → 昇る → 神に受け入れられる ということが、サムソンの生涯の中心線であったことを覚え、この構造が、誕生の場面で「先に啓示」されていた。この場面を「サムソンの死の型」として覚え、彼の献身の犠牲は、誓願の子の誕生に示され、誓願の完成として描かれたことを見た。そして、このことは、「誓願の子」の救いの働き、御国の完成の働き、教会の完全な整えについて、黙想本文の中で考察した。

XV. 異邦の女＝外に落ちたイスラエル（士師記14-16章）

— 姉妹構造の逆転した影：ローマ11章の奥義

【主要引用】 士師記14-16章（ティムナの女、ガザの女、デリラ）

【補助引用】 エゼキエル23章（姉＝サマリヤ、妹＝エルサレム）・エゼキエル16章（花嫁の墮落）・ローマ11:11-32（外に落ちたイスラエルと異邦の満ちる時）・エペソ2:11-22（一つの新しい人）

【語彙根拠】 「姉と妹」＝二つの民・二つの契約の象徴・「良い（*good*）」＝後の者が先になる逆転の語彙

物語の中に、サムソンがどこまでも異邦の女を愛し続け、一体に至らなかった物語が描かれた。このことに何の意味があるのか。

異邦の女、外に落ちたイスラエル、花嫁の位置の一時的移動、ローマ11章の奥義について、これらを統合し、「異邦の女＝外に落ちたイスラエルの影」であることを黙想本文の中で見てきた。

結び. 象徴体系の統合 — 一つの方向へと収束する終末の「奥義の影」

サムソン物語に置かれた象徴は、互いに離れた断片ではなく、すべてが一つの方向へと向かっている。

誓願に始まり、弱さを通り、憐れみを受け、やがて一つへと結ばれ、最後には神の前に立ち上るといふ、聖書全体に流れる救いの歩みである。

獅子と蜜、晴着十着、ジャッカルの火、焼かれた畑、脛と腿、岩の裂け目、縛られる義の者、盲目、髪、そして死による勝利——これらはすべて、誓願の子が歩むべき道を、時代が満ちる前に影として示したものであった。

サムソンは誓願の子として、外に落ちた者を愛し、弱さの中で倒れ、見えなくなり、最後には自らを差し出してイスラエルに救いをもたらした。その姿は、花婿キリストの愛の影であり、また終末の教会が歩む献身の影でもある。

誓願の子は、自分の力ではなく、神の憐れみによって立ち上がる者である。弱さの中で砕かれ、岩の陰に隠され、髪を再び伸ばされ、やがて神の現れの時に備えられる者である。

サムソン物語は、表面にはねじれや破れが満ちているように見える。しかし象徴として読むとき、そのすべてが、**誓いに始まり、憐れみに覆われ、ひとつに結ばれ、神の前に立ち上るという救いの歩み**を、時代の前触れとして描いていたことが明らかになる。

この歩みこそ、創造以前に定められた愛の御旨であり、キリストにおいて明らかにされ、終末の教会において完成へと向かう神の救いの物語である。

サムソン物語は、その御旨が実現する終わりの日の出来事を示して置かれた、旧約の最深部にある奥義の物語であると黙想する。